

氏名：常松 祐介

私	は	、	設	計	活	動	と	研	究	を	行	き	来	し	な	が	ら	、	日	
本	の	「	歴	史	と	デ	ザ	イ	ン	」	に	取	り	組	ん	で	い	き	た	
い	と	考	え	て	い	ま	す	。												
私	が	建	築	を	志	し	た	き	っ	か	け	は	、	日	本	の	風	景	と	
の	出	会	い	に	あ	り	ま	し	た	。	大	学	一	回	生	の	冬	、	ロ	
一	カ	ル	線	を	乗	り	継	い	で	訪	れ	た	奥	只	見	の	集	落	を	
目	に	し	た	瞬	間	、	こ	れ	ほ	ど	に	美	し	い	暮	ら	し	が	あ	
っ	た	の	か	と	強	い	衝	撃	を	受	け	ま	し	た	。	そ	れ	以	来	、
そ	の	残	像	に	惹	か	れ	る	よ	う	に	し	て	、	「	日	本	の	伝	
統	を	ど	の	よ	う	に	引	き	継	ぎ	、	か	た	ち	に	し	て	い	く	
か	」	、	こ	れ	が	私	の	テ	ー	マ	に	な	り	ま	し	た	。			
「	歴	史	と	デ	ザ	イ	ン	」	、	こ	れ	ら	を	正	し	く	つ	な	ぎ	と
め	る	に	は	、	設	計	活	動	と	研	究	の	双	方	に	よ	る	ア	プ	
ロ	ー	チ	が	欠	か	せ	ま	せ	ん	。	近	年	、	観	光	や	エ	ン	タ	
ー	テ	イ	メ	ン	ト	を	筆	頭	に	、	「	日	本	ら	し	い	」	コ	ン	
テ	ン	ツ	が	注	目	さ	れ	て	い	ま	す	。	し	か	し	、	そ	う	し	
た	コ	ン	テ	ン	ツ	の	多	く	が	、	日	本	的	な	記	号	を	表	層	
的	に	反	復	す	る	だ	け	の	、	一	過	性	の	流	行	と	し	て	消	
費	さ	れ	て	い	ま	す	。	そ	ん	な	今	だ	か	ら	こ	そ	、	自	分	
の	手	で	歴	史	を	解	き	ほ	ぐ	し	、	新	た	な	創	造	へ	と	繋	

げていくことが求められています。

そのため私は卒業後、博士課程に進学し歴史とデザインについて研究を進めると共に、自らの建築事務所を主宰し、研究の知見を生かした設計活動を行っていきます。

私の目下の研究テーマは、「歴史的建造物の再生」です。今後日本でも既存の建築ストックの利活用が課題となってくる中で、「歴史的建造物の再生」は、街の魅力を向上し、地域の拠点を創生するポテンシャルを持っています。しかし、そうしたリノベーション・アーキテクトという職能は日本では確立されておらず、文化財を再生していく取り組みは困難な状況にあります。

私は、オランダでの実務経験や事例研究を活かし、様々な専門家を巻き込みながら、日本の歴史的建造物が魅力的に再生されるための道を開きたいと考えています。そのためには専門知識と実務能力が欠かせず、まさに研究と設計活動を横断する私にしかできない仕事

だと考えています。

さらに大学では、設計スタジオを主催し、ひとと対話しながらデザインしていくことの可能性を探っていきます。こうした開かれたデザインの方法こそが、今後建築が社会の中でプレゼンスを発揮する上で重要であり、大学はそうした取り組みの要とならねばなりません。

研究、設計、教育。大学を拠点にこれら三つの取り組みを発信しつづけることが私の務めであり、しいては「日本の伝統をどのように引き継ぎ、かたちにしていくか」という課題への解答にもなっていくと信じています。